【研究論文】

保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果

― 切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究 ―

佐　善　　圭*

要　旨

日本古来の切り紙である「紋きり遊び」を基礎として、染め紙の要素を導入した新しい造形の授業試案を立案し、２年間実施した。入学当初に実施した学生アンケート調査では、52％の学生が「いままでの美術制作に関し、創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことが出来なかった」と回答していたが、本実践授業を受講後に、その割合は4.8％に減少した。美術家としての経験を踏まえ、初級図画工作のエッセンスを盛り込んだ新しい授業内容は、受講生に創造の喜びや制作の楽しみを喚起させることが分かった。また、学習の充実度は、授業に対する学生の前向きで、良好な姿勢にも現れていることも明らかになった。

Abstract

Based on an old Japanese play, "family crest cutout," the author has planned a new modeling class with dyed-paper elements, tried it for two years and proclaimed its details. About the creation pleasure and production contentment in art production, 52% students denied upon enrollment, but the rate declined to only 4.8% after attending this class. This class with the primary art quintessence has aroused their creation pleasure and production contentment, and made their attitude and posture positive in the class.

Ⅰ．はじめに

保育者養成校の教育課程において、造形教育の分野は、音楽、体育分野と並び、中核となる演習科目のひとつである。しかし、本学、岡崎女子短期大学において、平成20年、21年度に実施した、美術研究室による入学当初の学生調査[1]では、「美術に苦手意識を感じる」と回答した学生が約７割（68％）も存在し、「いままでの学校において、創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことが出来なかった」と、回答した学生も約５割（52％）に達した。

近年では絵を描くことを嫌う子どもが増え、幼児期でさえ「絵を描かない」また、「描くことに楽しみを感じない」子どもが増加傾向にあり、問題視されている[2]。しかし、保育者養成校の造形教員は、このような入学以前の美術教育に対して苦手意識を感じ、残念ながら創造の喜びを得ることができなかった学生にも、大学での学びの質を向上させることで苦手意識を好転させ、卒業後には保育者として、子どもたちの豊かな造形活動を支援し、幼児教育の造形分野に自信を持つ人材として育成する役割を担っている。

一般的に「美的資質は持って生まれたもの」という思い込みがある。事実、生まれながらにして絶対音感を持つ音楽家や突出した身体能力で頂点に立つアスリートと同じように、先天的な色彩感覚に優れ、歴史に残る芸術家も無論存在する。しかし、筆者の体験からすれば、誰でも美術に興味を持って効果的な学習を積み重ねると、美的資質は、徐々に磨かれ、それと共に技術も向上していく。そして、楽しみながら探求した色やかたちが結果的に個性として開花し、いつしか、その人にしか創ることができない美しい表現へと昇華していくのである。

そこで上記の考え方を実践するために、自身の美術家としての経験を踏まえ、初級図画工作のエッセンスを盛り込んだ新しい授業内容の立案に日々努力している。本稿では昨年度より実践してきた『はさみを使った造形』のセクションとして、「切り紙」と「染め紙」を融合した、新たな「切り染め紙」という授業試案を提示し、その授業内容と研究成果について考察するとともに、今後の課題について述べたい。

Ⅱ「紋きり遊び」の概要

日本古来の切り紙である「紋きり遊び」は、江戸時代に家紋を切り抜く職人の紙技として発達し、庶民に流行した粋で知的な造形遊びのひとつであっ

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

た。これらの紋様は、当時の寺子屋で使用されていた『紋形切様伝』[3] などの教科書にも掲載され、多くの切り絵意匠は、着物や食器、雑貨などにも用いられていた。紋様を量産する「紋切型」は、「型どおりのやり方や見方」[4] という意味で現在も使われている。

また、古河藩主土井利位（どいとしつら　1789～1848）が執筆した『雪華図説』[5] は、日本で初めての雪に関する自然科学書として発刊された。これは、顕微鏡を用いた雪の結晶＝「雪華」86種の観察図鑑であったが、（図１）科学的成果として評価されるばかりではなく、日本的な情緒の世界に裏付けられた新しい「雪華」という美を発信し、江戸期の意匠やファッションとしても流行した。[6]

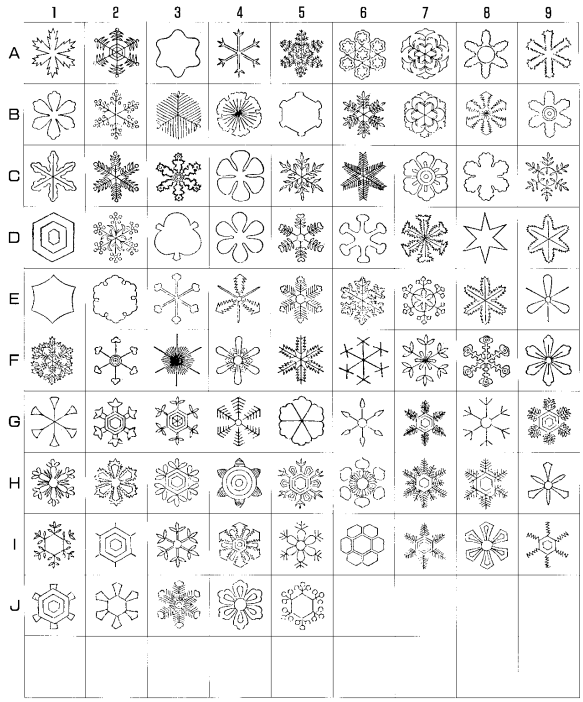


図１　土井利位の雪華図

このように紋様の伝承は、続く明治期の『模様紋帳諸職雛形』[7] や昭和初期の学校教科書にも掲載されていたが、戦後から高度成長期に向かう間に、忘れ去られた手業となっていった。近年、古風なデザインを懐かしむクラフトブームの到来により、少しずつ現代人にも浸透し、矢口加奈子の「やさしい切り紙」[8] や下中菜穂の「切り紙もんきりあそび」[9] の中でも、その作り方が取り上げられている。また、平成21年4月に実施された全国学力・学習状況調査（文部科学省）中学校「数学Ｂ」[10] で「紋きり遊び」の問題が出題され、各種メディアでも話題となった。

Ⅲ　教育環境

本学では、「造形」は専門科目に分類され、その中で教科専門の演習科目として設置されている。卒業必修の科目であり、幼稚園教諭免許状および保育士資格においても必修の取得単位である。「造形」は、１年次の通年科目として１年間で30回（週１回90分）行われる。本学の幼児教育学科には、通常の短期大学課程２年制の第一部と、昼間二交替制３年制の第三部が設置されており、平成20年度の第一部入学者は232名、第三部は75名が入学し、平成21年度の第一部入学者は229名、第三部は61名であった。各年度共に第一部６クラス、第三部２クラスの合計８クラス編成となっている。美術専任教員が筆者１名のため、授業のコマ配当により、平成20年度は筆者が第一部を３クラス、第三部を２クラスの合計５クラスを担当し、2名の非常勤教員が３クラスを指導した。平成21年度は筆者が第一部を２クラス、第三部を２クラスの合計４クラスを担当し、非常勤講師が４クラスを指導している。

Ⅳ　授業実践の方法

ここでは、筆者が立案した『はさみを使った造形』の中で行う、「切り染め紙」の授業について、実際の流れを進行とともに詳細を述べる。

１．準備

学生には、実施授業の一週間前に、次回の授業準備として、切り紙の参考作品数点を見せ、概略を説明しておく。現在市販されている折り紙は、「教育おりがみ」と呼ばれている定番の折り紙や和紙の風合いが美しい友禅千代紙のほかにも、裏表で色彩が異なる両面折り紙や、特殊なものでは、複数の色がグラデーションに印刷されているオーロラ折り紙、角度によって立体的な模様が光って見えるホログラム折り紙、アルミホイルのような素材で出来ているホイル折り紙、など多数ある。今回の制作では、作品完成の段階で折り紙のしわを伸ばす必要があるため、アイロンの熱で特殊な材質が溶け出したり、張り付いたりすることがない、一般的な無地の折り紙（15×15cm）を複数枚用意するように指示しておく。

２．第１回解説

切り紙には様々な手法、形状、デザインがあるが、初級図画工作の範囲として押さえておかなければならない、基本的な造形テクニックのいくつかを受講

生に解説する。

⑴切り紙の種類

切り紙の折り方には、大きく分けて２通りある。ひとつ目は、山折り・谷折りの順に屏風のように折り重ねる「屏風折り」タイプ、ふたつ目は、４つ折り、６つ折り、８つ折り、など、同じ形に折り重ねていく「重ね折り」タイプである。この２種類が、基本形となる。

⑵「屏風折り」

まず、「屏風折り」について解説する。折り紙を半分に折り、２枚を重ねる『２枚折り』は、はさみで切ったあとに広げると線対称のシンメトリーな図柄が出現するため、完成図のイラスト半面分を折り目を中心線に描く。上下、左右が対象になった絵柄や、ふたつのものが並ぶ絵柄に最適である。（図２，３）

図２　「屏風折り『２枚折り』」

図３　「屏風折り『２枚折り』」

さらに「屏風折り〈四角折り〉」については、折る枚数を４枚に増やすと『４枚折り』（図４）、

図４　「屏風折り『４枚折り』」

８枚で『８枚折り』（図５,６）にバリエーションが増える。ひとつの絵から生まれる絵柄が倍増するので、開いたときの面白さを味わえ、保育者となってからの壁面装飾や行事などに応用することもできる[11]。折り重ねると紙が厚くなるので、切るときはしっかり押さえることを周知し、中心線をすべて切断しない図柄を考えることを説明する。

図５　「屏風折り『８枚折り』」

図６　「屏風折り『８枚折り』」

すべての切り紙制作に共通する基本は、時間をかけて、ゆっくりていねいに作業することであり、作品を美しく仕上げる近道を学生に説明し、徹底させる。

⑶「重ね折り」

はさみの使い方に慣れ、基本的な作業を理解した上で、次に同じ形に折り重ねていく「重ね折り」について解説する。まず、重ね折りには、折った形状が三角形になる〈三角折り〉と、折った形状が長方形になる〈四角折り〉の２種類がある。イラストの

大きさやその範囲によって、ふたつの折り方を使い分けると良い。

四角折りの代表は、「重ね折り『４つ折り』」である。『４つ折り』は折り紙を長方形となるように半分に折り、次にその半分の正方形に折る。４等分した折り紙から絵柄を切ると四方に飛び出した図柄になる。

次に三角折りの代表は、「重ね折り『６つ折り』」である。60度の角度を６つに折る方法である（図７）。『６つ折り』が完成したところで、いくつかの参考作品を紹介し、各自、図柄を切り抜いていく。（図８）

この切り紙は、スノーフレークと呼ばれる、雪片の結晶と同様の六角形状の作品が出来上がり、シンメトリーの紋様が美しい。開くまで想像がつかないことが多く、思いもよらない美しい図案が出来上がる。幾通りかの基本練習を繰り返した後、オリジナルの図案を切り抜いていく。

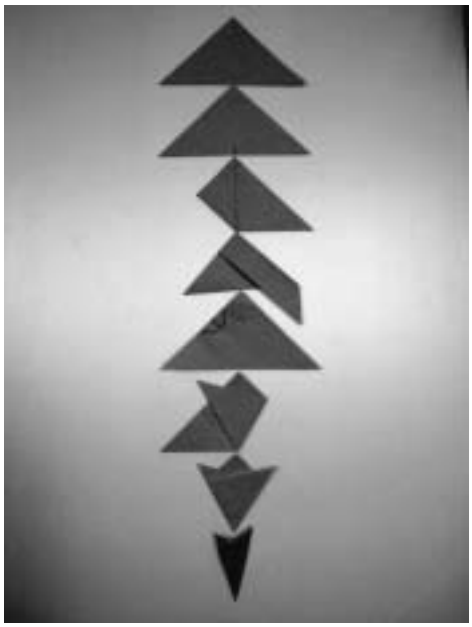


図７　「重ね折り『６角形折り』」の手順

図８　切り方の見本

図９　制作風景

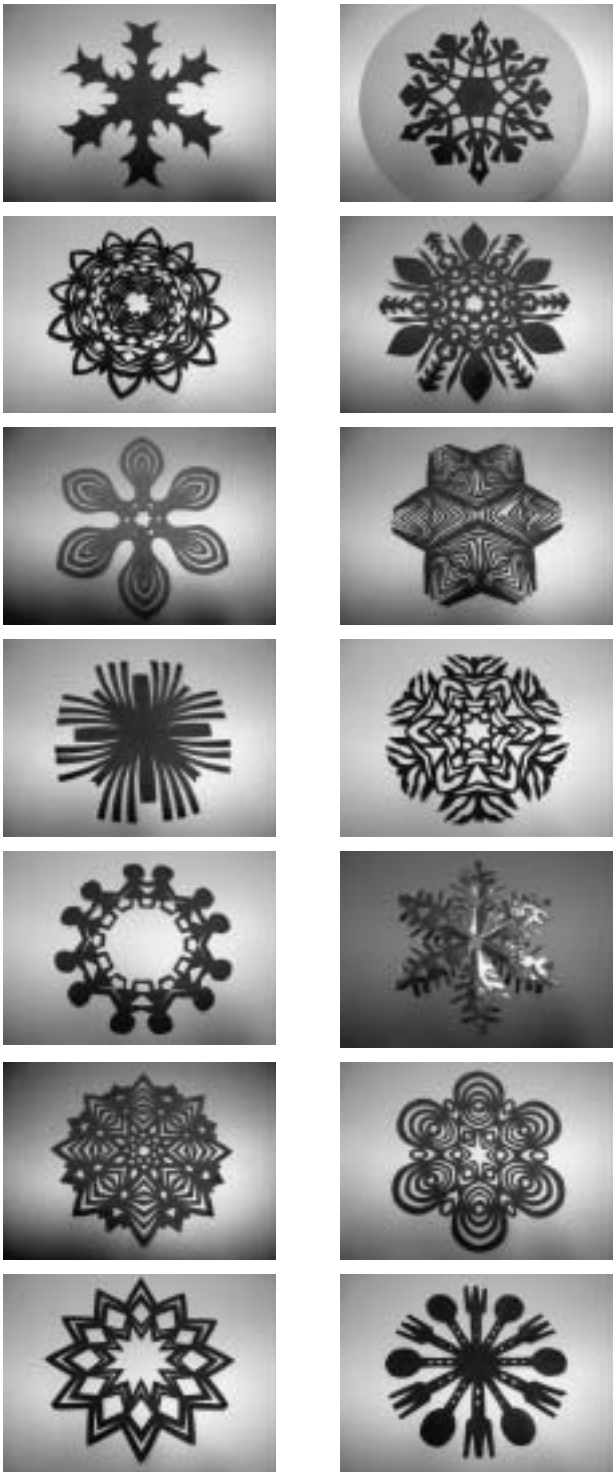


図10～23　学生作品

手に持った折り紙の面積が可能な限り少なくなるような形状に切り取ることが、複雑で意外性の高い作品に仕上げるポイントでもある。（図９）始めは、はさみだけで図案を切り進め、上達してきた段階でカッターなどを使用しても良い。切り終えたら、ゆっくりと折り紙を広げて完成させる。（図10～23）細かな図案は広げる時に紙が絡まりやすいので、細心の注意が必要である。完成作品には、中温度のアイロンをかけ、折りしわを取り除く。２回目の授業において、和紙による染め紙に発展させるため、より多くの図案を制作させ、好みの紋様を探し出すように指導する。

２．第２回目解説

前回の折り紙での試作品を返却し、染め紙として染色する紋様を数点選択させる。また開くときの楽しさや驚きが味わえるように、新たな形にも挑戦させる。（図24）はさみでの作業は前回より上達しているが、和紙素材に変わったことで紙が厚くなっているので、切込みがずれないように、ホチキス（ステープラー）で固定させる。

図24　制作風景

⑴染め絵への展開

まず、全体の手順に関して説明する。染料は、「彩液（墨運堂製）」を使用する。彩液は、顔料で造られた水溶性のインクで、紙や布の色付けに最適であり、墨流し、マーブリングの授業にも利用することができる。今回の染め紙は、混色の原理を学習するのに適した教材であり、市販の中から赤、黄、青の３色を選び、制作前に色の三原色や混色の理論について解説する。

図25　和紙を水につける

作業に入る前に、筆、絵皿、水バケツ、雑巾などの用具を準備し、机の上には新聞紙などを敷く。準備が完了したテーブルから順次、切り終わった作品を水につける。（図25）

この時、注意する点としては、しっかりと手で押さえ、切り終えた形が水中で崩れないようにする。この段階で形がずれると復元は難しい。全体が水に浸されたところで、引き上げて雑巾に挟み込み、数回上から力を加え余分な水分を取り除く。（図26）

図26　雑巾に挟み込む

始めに和紙に水をつけるのは、作品全体に染液を浸透させ易くするためであり、この工程を省くと、美しい混色には染まらない。また、表現したいイメージを持って制作させるとよい。染液は、筆で丁寧に塗り、上面が塗り終わったら、裏返してもう一面を塗る。（図27）

図27　作品に染液を塗る

筆で色を着けたままの状態では、混色も充分ではないので染液が全体に浸透したら、新しい新聞紙に作品を挟み、上から手で圧力を加える。何回か繰り返すことで中心まで色が行き渡るので、水分が抜けるまで行う。（図28）

図28　新聞紙にはさみ水分を抜く

充分に脱水したところで、作品をゆっくり広げていく。（図29）紙が重なり合っているので、折り畳んだ順番に少しずつはがすことが、ポントである。作品を乾燥させ、最終的にアイロンをかけてしわを伸ばす。完成。

図29　作品を広げる

⑵作品の展示、鑑賞

完成後の作品は、岡崎女子短期大学２号館１階の正面玄関、２階のガラス面に全作品を展示した。乾燥した作品は、さながら光を透すステンドグラスのようでもあり、ガラス面に接着するとより効果的である。作品を通して床に映り込む、色とりどりの色彩が華やかに見える。（図30）

接着には、住友３M社のスプレーのり55を使用した。55は、のり残りがなく接がせるタイプの接着剤で、造形の授業では使用頻度が高い。作品は単体でも美しいが、全ての作品をガラス面に接着すると、作品同士が響き合い、総合的な作品として、より素晴らしい空間の演出も可能となる。

作品は、制作だけで完結するのではなく、展示発表することで、初めて作り手のメッセージを他者に発信できるようになる。多くの人に鑑賞してもらうことで、作品に込めた思いや感情を共有することができるのである。また、作者から手離された作品を客観的に見つめ直すことは、作品を通して自らの内面を振り返ることにもなる。すなわち、これが作り手を成長させ、作品制作の自信に繋がり、徐々に個性として芽生えたものが、開花していくことになる。

図30　作品貼り付け風景

Ⅴ　受講者の意識調査と考察

⑴アンケートの内容

これまで、切り染め紙の実践について述べてきたが、新たな授業内容は、受講した学生にとって、どのような体験として受け取られ、どのような感想を抱いたのであろうか。制作終了時にアンケート調査を実施し、授業の効果を探った。

本アンケート調査における披験者数は、幼児教育学科造形（佐善担当）受講者126名（欠席者を除く）、調査時期は、平成21年11月上旬である。作品展示終了時の授業内にアンケート用紙を配布し、記入後に回収した。

質問内容は、次の通りである。

Ｑ１．この授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか

Ｑ２．この授業以前に、切り紙をしたことがありますか

Ｑ３．ある場合、それは、いつ頃ですか（複数回答可）

Ｑ４．この授業以前に、染め絵をしたことがありますか

Ｑ５．ある場合、それは、いつ頃ですか（複数回答可）

Ｑ６．今回の『切り染め絵』についてどのように感じましたか

Ｑ７．教師のアドバイスは、役立ちましたか

Ｑ８．準備された材料や道具は、制作に役立ちましたか

Ｑ９．作品を展示してどのように感じましたか

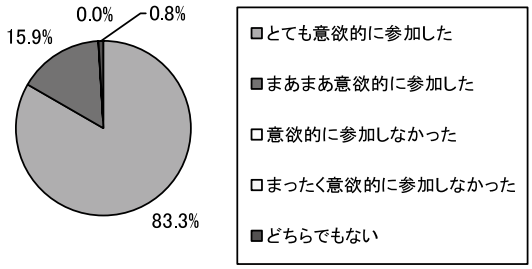
Ｑ10．創造の喜びや制作の充実感を味わうことができましたか

Ｑ11．今回の授業で印象に残っていることを自由に記述してください

⑵分析と結果

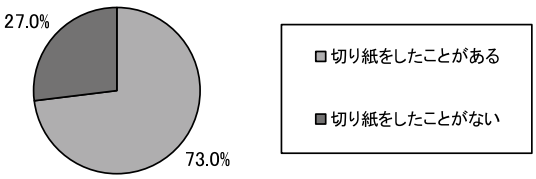
Ｑ１.「授業には、意欲的かつ積極的に参加したか」についてであるが、とても意欲的かつ積極的に参加した受講生が83.3％（105名）、まあまあ意欲的かつ積極的に参加した受講生が15.9％（20名）、どちらでもないが0.8％（１名）であった。（表１）ほとんどの受講生が意欲的かつ積極的に参加していた結果が示された。

表１　授業には、意欲的かつ積極的に参加しましたか



Ｑ２.「この授業以前に、切り紙をしたことがありますか」の回答には73％（92名）が「ある」と答え、27％（34名）が「ない」と答えた。（表２）

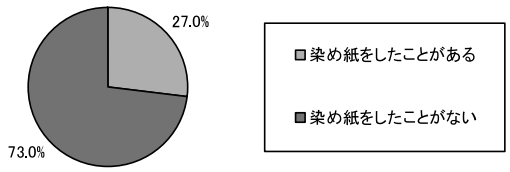
表２　この授業以前に、切り紙をしたことがありますか



Ｑ３．時期に関しての質問では、幼稚園、保育所が44名、小学校が54名、中学校が13名、高校生以上が16名であった。小学校までの早い時期に体験者が多いのは、切り紙が比較的に親しみやすい教材であるからだろう。小学校での体験者が幼稚園、保育所時代より多いのは、はさみを上手に使用できるようになる時期に関連があると推察される。

Ｑ４.「この授業以前に、染め絵をしたことがありますか」の回答は、偶然であるが切り紙の人数比率と正反対の27％（34名）が「ある」と答え、73％（92名）が「ない」と答えた。（表３）

表３　この授業以前に、染め紙をしたことがありますか

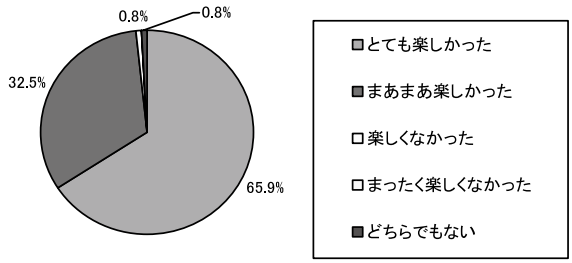


これは、第一にはさみ、折り紙のみで始められる切り紙に対し、染め紙では染色液や画筆、絵皿などの道具が必要なためと考えられる。染色液などの材料は意外と高価なために常備出来ない施設もあるだろう。また、通常の染め紙と呼ばれるものは、単純に折った紙の端を液に浸け開く、という展開が一般的で、学校教育の現場で児童、生徒が興味を持ちにくい課題であると考えられる。

Ｑ５．体験時期は、幼稚園、保育所が11名、小学校が17名、中学校が10名、高校以上が1名であった。小学校時代に体験した者が多いものの、幼稚園、保育所から中学校までは、平均して制作されている様子が分かった。しかし、切り紙の高校体験者数が17％（16/92名）に比べ、染め紙の高校体験者数が３％（1/34名）と極端に少ないことも、上記の学校現場での染め紙指導の推察を裏付けるものと考えられる。

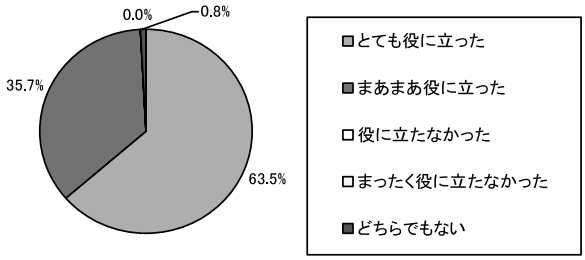
Ｑ６.「今回の『切り染め絵』についてどのように感じましたか」には、65.9％（83名）が、とても楽しかった、と回答し、32.5％（41名）が、まあまあ楽しかったと回答した。他に、つまらなかった0.8％（１名）、どちらでもない0.8％（１名）と回答した者がいた。（表４）これは創作の充実感に繋がる質問であるが、予想していた以上の「楽しい」との反響であり、次回のアンケートでは、具体的にどこが楽しかったのか、また、なぜ楽しかったと思うのか、などについても詳しく調査していきたい。

表４　今回の『切り染め絵』についてどのように感じましたか



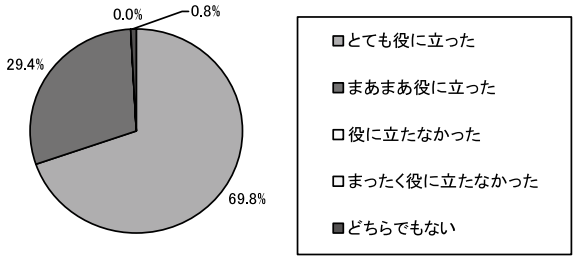
Ｑ７.「教師のアドバイスは、役立ちましたか」には、とても役に立った63.5％（80名）、役に立った35.7％（45名）、どちらでもない0.8％（1名）であった。（表５）概ね教師のアドバイスを聞き、制作に役立てていたことが確認できた。

表５　教師のアドバイスは、役立ちましたか



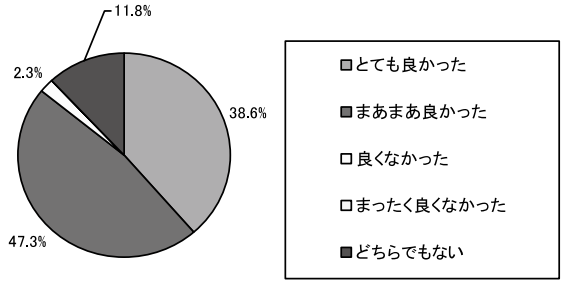
Ｑ８.「準備された材料や道具は、制作に役立ちましたか」には、とても役に立った69.8％（88名）、まあまあ役に立った29.4％（37名）、どちらでもない0.8％（1名）であった。（表６）役に立たなかったと回答した者はおらず、本授業では適切な材料、道具の準備がなされていたと考えられる。

表６　準備された材料や道具は、制作に役立ちましたか



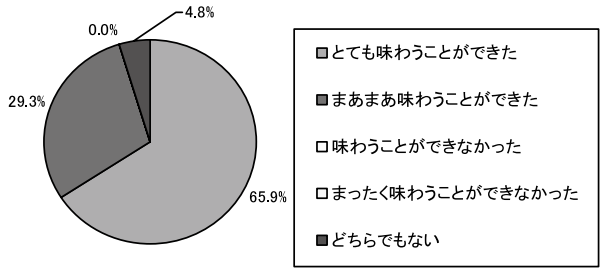
Ｑ９.「作品を展示してどのように感じましたか」とても良かった38.6％（49名）、まあまあよかった47.3％（60名）、良くなかった2.3％（３名）、どちらでもない11.8％（15名）であった。（表７）これは、作品展示されたことで、自らの作品を客観視した結果と考えられる。教室では、自分の世界に没頭し、作品に対して自己満足していたものが、数多くの作品の中に展示されたことで、自己の表現を見つめ直すきっかけとなることも、展示の良さであろう。

表７　作品を展示してどのように感じましたか



Ｑ10.「創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことができましたか」では、とても味わうことができた65.9％（83名）、まあまあ味わうことができた29.3％（37名）、どちらでもない4.8％（６名）と回答している。（表８）本稿の「１．はじめに」にも前述したが、平成20年、21年度に実施した美術研究室による入学当初の調査結果では、「いままでの学校において創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことが出来なかった」と、回答した学生が52％であった。今回のアンケートで65.9％の受講者が「創造の喜びや作品制作の充実感を充分に味わうことができた」と回答し、「まあまあ味わうことができた」を含めると、合計で95.2％の学生が創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことができたと回答している。本授業の取り組みが、造形教育の本質ともいえる「創造の喜び」に結びつき、学習効果に影響したことが、この結果から確認できた。

表８　創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことができましたか



Ｑ11.「今回の授業で印象に残っていることを自由に記述してください」では（以下、原文のまま掲載する）、

制作に関した記述として、

・最初から作品がだんだん成長していることが分かったので切るのも楽しくなった。
・先生のアドバイス通りにやるとうまくきれいな模様ができたので楽しかった。
・特別な道具や技術が必要でないところが良かった。
・毎回、広げるまで予想できない形でとても楽しくできた。
・何回やってもひとつひとつがみんな違っていて、感動しました。
・みんなそれぞれに個性が出ていたので良かった。
・すべての作品がオリジナルで、人とかぶらないのが良い。
・小学校の頃にも行ったことがあるけど、今は、技術も工夫の仕方も違い、喜びが大きかった。
・どうなるか開けてみるまで分からないワクワク感がたまらなく好き。
・私でもこんなに簡単にきれいなものが作れるなんて凄いなと思いました。

・参考作品を見たとき素晴らしく感動したけど、実際に自分で作っても同じ感動を味わえた。
・頭を使うのは苦手だけど、はさみを動かしているうちに予想外の形になって面白かった。
などがあった。

反面、
・作品を開くとき、切れて残念でした。
・切り紙の時、切りすぎてしまいました。
・せっかく作ったのに、破れてしまいました。
・思うようなイメージに仕上がりませんでした。
・友達のほうが上手に出来ていました。
・３色が混じって汚い色になった。
など、マイナス面に対する記述も見られた。

展示に関する記述には、
・一点でもいいけど、全部展示していつもの大学とは違う景色に感動した。
・大学祭に来てくれた友人に見せたら「素敵な学校ね」と言われ、感動しました。
・展示をしたら切り紙が素敵な『作品』に生まれ変わりました。
・みんなの作品と一緒に飾られて、よりきれいな作品になったと思いました。
・作品を集めて飾る醍醐味を知りました。
・ガラスに張るなんて、とっても素敵なアイディアで、きれいなんだなと思いました。
などが見られた。

また、
・絶対子どもに教えてあげたいと思いました。
・保育者になったら絶対やります。
など、これからの抱負も記され、

・あまりに感動して、家に帰ってから家族で作っちゃいました。
・手と心と体を動かすこの授業は、とても心がほぐれて楽しい授業です。ありがとうございました。
・大学に入学してから造形が一番楽しい授業です。
など、アンケート集計の際に、筆者が目を通すことを考慮しての記述と思われるが、指導の方向性を確認する上で参考となった。

Ⅵ　まとめ

本研究では、切り紙、染め紙を融合した造形教育の新たな授業試案を実践し、その詳細を記述するとともに、学生のアンケート調査を元に授業の効果と成果を評価するものとした。

その結果、入学までに切り紙を体験してきた学生が約７割存在するのに対して、染め紙を体験してきた学生が約３割程度しか存在しないことが確かめられた。授業を実践した印象として、切り紙より染め紙に対する反響がより大きく感じられたのは、予期しない変化を遂げる染め紙作品への感動もさることながら、初体験者の数にも大きく影響していることが分かった。

また、ほとんどの受講生が授業に対し、意欲的かつ積極的に参加し、指導者のアドバイスを真摯に受け入れながら、つねに学ぶ姿勢で臨んでいることも数値の上で示された。保育者養成校の造形科目では、子どもの造形活動を援助する保育者としての基礎的な技能や知識を身に付け、さまざまな素材による表現手法の演習に取り組むが、その上で何よりも大切なことは、「楽しく学ぶ」ことであろう。その点で、受講生の多くが楽しさを体感し、作品制作を通して充実感を得ていたことを確認できたのは、今後の授業試案作成の方向付けに大変参考となった。

今後も、造形教育において自身の経験を踏まえ、新しいエッセンスを盛り込んだ授業の立案に日々努力していきたい。

１）調査協力：岡崎女子短期大学幼児教育学科「造形(佐善担当)」受講者、平成20年度194名、平成21年度137名、合計331名
２）藤原智美『なぜその子どもは腕のない絵を描いたのか』祥伝社、2005年、p.45
３）荒井伊三郎編、「紋形切様伝[角書]新版」、～1871年、pp.１－９
４）新村出編、『広辞苑第３版』、岩波書店、1985年、ｐ.2391
５）土井利位、『雪華図説』、1832年、p.17
６）古河歴史博物館編、『開館５周年記念特別展示図録、雪の華『雪華図説』と雪の紋様の世界』、1995年、pp.１－48
７）「模様紋帳諸職雛形」、請康堂：東京、1881年、pp.23－27
８）矢口加奈子、『やさしい切り紙』、池田書店、2007年
９）下中菜穂、『切り紙もんきりあそび』、宝島社、2007年
10）文部科学省、「平成21年度全国学力・学習状況

調査中学校第３学年『数学Ｂ』」、2009年、pp.
１－２
11）子どもの造形表現研究会編、『保育者のための基礎と応用　楽しい造形表現』、圭文社、2007年、p.60

図１古河歴史博物館編、『開館５周年記念特別展示図録、雪の華『雪華図説』と雪の紋様の世界』、1995年、p.6

図２～30　筆者撮影